

2021 年 2 月 14 日（日）「言葉の穢れと聖め」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 7:19-22

- 19 知恵は知恵ある者を力づけ、町にいる十人の権力者よりも強くする。
- 20 地上には、罪を犯さずに善のみを行う正しき者はいない。
- 21 人が語る言葉にいちいち心を留めるな。そうすれば、あなたの僕の呪いの言葉に、耳を貸すこともない。
- 22 あなた自身が何度も他人を呪ったことを、心は知っているはずだ。

《新改訳 2017》伝道者の書 7:19-22

- 19 知恵は町の十人の権力者よりも、知恵のある者を力づける。
- 20 この地上に、正しい人は一人もいない。善を行い、罪に陥ることのない人は。
- 21 また、人の語ることばをいちいち心に留めてはならない。しもべがあなたをのしるのを聞かないようにするために。
- 22 あなた自身が他人を何度もものしったことを、あなたの心は知っているのだから。

【序論】

言葉というものはいつの時代でも変化を続けているものです。とりわけ、デジタル化が進む現代にあって、コミュニケーションの性質は大きく変わりつつあります。私自身も LINE をはじめとする複数のコミュニケーションツールを使用するようになりましたが、その便利さとともに SNS 依存やネット上のいじめの問題などにも留意しなければならぬと感じています。

思い返すと、私は小学生の頃、滋賀県に住む二年上の従兄弟と何年にも亘って文通を続けました。その手紙集がしばらく前に、叔母から送られてきて、今の今まで残しておいてくれたことに驚きを禁じ得ませんでした。子どもの頃から手紙によるやりとりの温かさ、返事が来るまでの時間を待つ楽しさを学んだ私は、妻と出会ってから結婚するまでの一年間、香川と東京でほぼ毎週手紙のやり取りを続けました。まだスマホは普及していなかった時代でしたが、ショートメールと併用しながらのアナログコミュニケーションは二人の心の交流において大切なものだったと思います。

今は SNS があれば一瞬にして海外の人とのリアルなコミュニケーションが可能な時代です。一方で、デジタルによるコミュニケーションの活発化により、「相手のことばに即応したり、表情を読み取ったりする対人関係の力は醸成されにくくなった」「価値観や世代が異なる人に理解してもらうことに対して敏感ではなくなった」と指摘する社会言語学者もいます（三宅和子）。

【本論】

今日の箇所は再び「言葉」について読者に考えることを求めます。知恵ある言葉があれば、罪深い言葉もある。言葉ほど人間に影響を与えるものはないでしょう。言葉は人を生かしもし、殺しもする。私たちが人から受ける言葉、人に対して発する言葉を吟味していきたいと思います。

本論 1. 権力者にまさる知恵

知恵は知恵ある者を力づけ、町にいる十人の権力者よりも強くする。(7:19)

ここで言われていることのポイントは明確です。知恵は人間の他の性質や能力よりもはるかに重要である。その重要性は、社会的に力のある人々(社会を動かしている権力者)にまさると。「十人の権力者」とは、議会において議決権を有する人々を指すでしょう。実際これらの人々によって組織は動き、国の進むべき方向性が定められているかもしれない。しかし、コヘレトは言います。知恵はそれらの人々よりももっと重要であると。

ここで取り組まなくてはならない課題は、「知恵とは何ぞや」ということでしょう。これまでに本書から学んできたことを振り返ると、『知恵(חָכְמָה／ホフマー)』とは『(戦争の) スキル』『(管理上の) 知恵』『判断力』『思慮分別』『(倫理的・宗教的) 知恵』と説明されていました¹。今日の箇所を文脈で読むと、20 節以下で語られていく内容との関わりで判断する必要があるでしょう。つまり、「地上には、罪を犯さずに善のみを行う正しき者はいない」(7:20) という人間理解そのものが「知恵」であると言われていることになる。これは「(倫理的・宗教的) 知恵」に分類されると私は考えます。このことがどうして「町にいる十人の権力者」にもまさる知恵と言えるのか。それはつまり、人間社会を蝕む問題の根源を見抜く洞察にほかならないからでしょう。人間が基本的に罪深い存在であるとするならば、人間社会で飛び交う言葉も、各々が心に思うことも悪しきものとならざるをえない。権力者が何人集まったとしても、彼ら自身が罪人であるのだから、すべてにおいて正しい判断に至るということはありません。人間の存在論的問題に取り組むところに「まことの知恵」があるとコヘレトは考えます。

しかし同時に、コヘレトは「人間は罪深いから仕方がないんだ」という「諦め」を勧めているのではないことにも留意すべきでしょう。罪人は罪から救われなくてはならない。自らの罪を知り、へりくだって救いを求めることこそ「知恵の中の知恵」なのです。ここに罪と救いを宣べ伝える宗教の重要性があります。

¹ No.3 2020 年 5 月 17 日 コヘレト 1 章 12～18 節「まことの知恵、まことの知識」

本論 2. 他人の呪いの言葉から自分の心を守れ

以上のことを前提に置くと、21 節以下で言われていることが理解しやすくなります。

人が語る言葉にいちいち心を留めるな。そうすれば、あなたの僕の呪いの言葉に、耳を貸すこともない。(7:21)

人間が考えることは元より悪いことなのだから、今更のように驚き怪しむなど。ノアの洪水の後、神様が言われたことも同じです。

主は宥めの香りを嗅ぎ、心の中で言われた。「人のゆえに地を呪うことはもう二度としない。人が心に計ることは、幼い時から悪いからだ。」(創世 8:21)

とはいえ、私たちは人から中傷されるのは誰しも嬉しいものではないでしょう。SNS の普及によって、無関係の人からひどい言葉を投げかけられる有名人が増えてきています。最近では女子プロレスラーの方が「誹謗・中傷」によって自死に追いやられたという事件がありました。肉体の強さと心の強さはイコールではないことを知ります。私たちは、自分の言葉が時に人を殺しうるということをよく認識しておかなくてはなりません。また同時に、目立つ人であればあるほど、人々の非難や鬱憤晴らしの標的となりやすいことも心に刻んでおかなくてはならないでしょう。

21 節で「**あなたの僕の呪いの言葉**」という表現が出てくるところに、コヘレトが特に「上に立つ者」(主人)に向けてこれを語っていることが窺われます。人々をまとめ、仕事を割り振るような立場の人々は、表面的にはどんなにうまく行っているように見えたとしても、陰では悪口を言われているものです。誰が何を言っているかを調べ上げることは無益であるとコヘレトは言います。もしそういうことをしたら、あなたは必ず「**僕の呪いの言葉に、耳を貸す**」ことになる。ここでの「呪い」という訳は少々行き過ぎで、原文で使われている「קלל」(カーラル)という言葉は「軽く扱う」「中傷する」「不平を言う」などのニュアンスで捉えられるものです。人々をまとめる立場にある人は、誰しもが自分を愛してくれるわけではないことを忘れてはならないでしょう。

リーダー的な立場でなくても、人は誰かから誹謗・中傷を受けることがあります。このことに何も感じない人はなく、実際つらいことです。コヘレトはそのことを重々承知の上で、必要以上にそういう言葉に煩わされてはならないと言います。むしろ、なぜそういう言葉がその人から出てくるのかを考えよと。

「人は、誰でも困難に直面したとき、それを他人のせいにして、人を責めたくなるものです。人は、そうしないでは自分が成り立たないような気持ちに追い込まれている結果として、『人を呪う』ようなことまでするのです。」(高橋秀典 p.109)

本論 3. 他人を裁く罪から自分を守れ

しかし、コヘレトはこのことを「他人」の問題だけに留めることを読者に許してはいません。

あなたが何度も他人を呪ったことを、心は知っているはずだ。(7:22)

これを言われたらぐうの音も出ないでしょう。「呪ったことはない」と言う人がいるかもしれません。しかし、中傷したことはあるのではないか。「悪い言葉を発したことはない」と言う人がいるかもしれません。しかし、心で思ったことはあるのではないか。主イエスが求める倫理基準は高いです。

あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、「殺すな。人を殺した者は裁きを受ける」と命じられている。しかし、私は言うておく。きょうだいに腹を立てる者は誰でも裁きを受ける。

きょうだいに「馬鹿」と言う者は、最高法院に引き渡され、「愚か者」と言う者は、ゲヘナの火に投げ込まれる。(マタイ 5:21-22)

この基準が呈示されたとき、他人事と捉えるのではなく、自らを省みることが「知恵」なのです。到底その基準に及ばない自分、罪ある自分、救いが必要な自分を認め、神の御前にへりくだることを、人間の生き方の基礎としたい。人から悪く言われるのは気分が悪いものです。しかし、同時に自分も誰かのことを同じように悪く言うか、悪く考えることをしてきたことを思い出さなくてはならない。そして、自分を迫害する者のために祈るところにまで行き着けたとするならば、主イエスに一步近い者とされたと言えるでしょう。

【結論】

しかし、上からの知恵は、何よりもまず、清いもので、さらに、平和、公正、従順なものです。また、憐れみと良い実りに満ち、偏見も偽善もありません。義の実は、平和をもたらす人たちによって平和のうちに蒔かれます。(ヤコブ 3:17-18)

自分の心に湧いてくるもの、自分の口から出てくるものが何であるかを、今一度吟味してみたいと思います。人の徳を立て、愛と慰めを与える存在、それがキリスト者であるはずです。言葉の聖めは、「神のことば」であるキリストとの交わりによってのみ与えられていくのです。

【祈り】

聖なる神よ。選びの器であった預言者イザヤもまた、神の栄光を目の当たりにしたとき、このように絶望の声を挙げました。

ああ、災いだ。私は汚れた唇の者、私は汚れた唇の民の中に住んでいる者。しかも、私の目は王である万軍の主を見てしまったのだ。（イザヤ 6:5）

この言葉はまことに私たち自身に当てはまります。誰もが汚れた言葉を心に持っています。願わくは、言葉による罪のスパイラルから抜け出し、むしろ祝福を与えることで、この世界に満ちる「言葉」に聖なる光を投げかける者になりたいです。まず私たちが福音に生きることができるように、主イエスに似た者となることができるよう、導いてください。主イエスとの絶え間ない交わりをとおして、このことが私たちの人生に、そして周囲に実現していくものとなりますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
聖いことばをもって万物を造り給うた、父なる神の愛、
人との交わりのうちに、福音に生きる力を与え給う、主イエス・キリストの恵み、
口より出ずる言葉のみにあらず、心に思うことまでも、罪より分離させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。